

【vol.34】インターバルの位置と、コードの構成音の関係性

こんにちは、大沼です。

ここまでインターバルについて色々やってきましたが、
とりあえず今回でひと段落です。

次回辺りから実際の曲を例に、フレーズやコード進行、
key との関係などを分析していきましょう。

何度も言っているような気がしますが、この『分析』が重要で、
これが出来ないと、たとえ楽曲をコピーしても、
そのネタを他で上手く活かさせません。

これでは非常にもったいないので、インターバル関係は特に、
踏ん張ってマスターして欲しいな、と思っています。

では、前回 5、6 弦のインターバルを確認したので、
今回は残りの 4、3、2、1 弦についてですね。

この辺りを理解していると、「コード」と言うモノが、
どんな理屈でその形(コードフォーム)になっているのかがわかります。

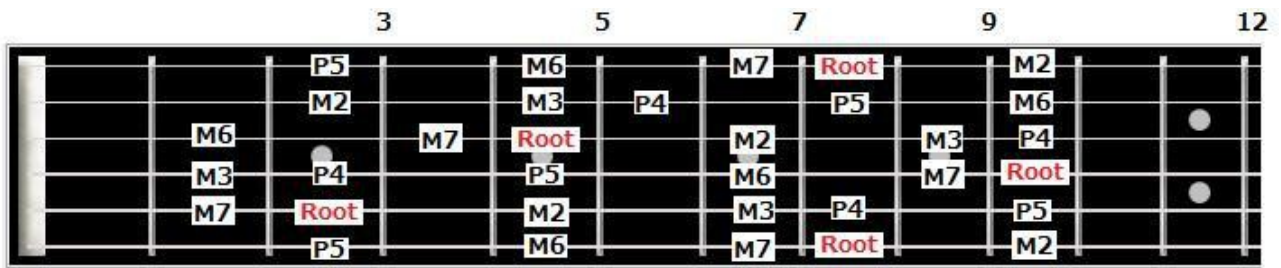
僕自身、この辺りの謎が解けた時は、かなり面白くなって来て、
ずっーと色んなコードを押さえながらインターバルの確認をしていた記憶があります。

そういった、「謎が解けて行く感じ」を、あなたにも味わって欲しいと思います。

それでは、まずは基本となるポジションから見ていきましょう。

相も変わらず、基準にする音は C 音で、スケールはメジャースケールです。

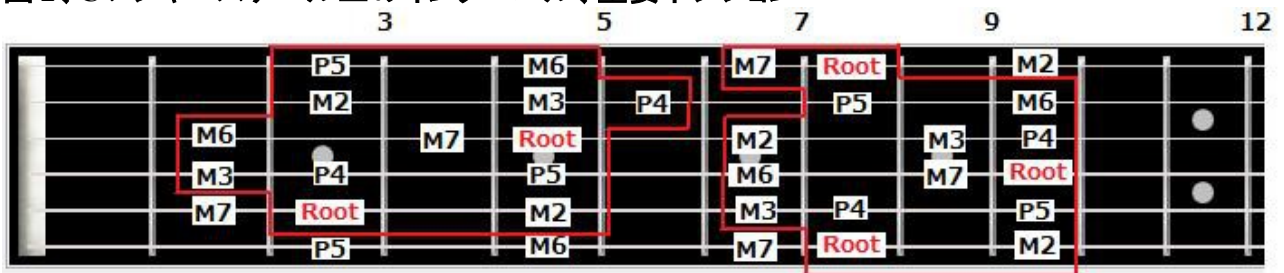
図 1、C メジャースケール上のインターバル



と、この図だけ出されても、ごちゃごちゃしていてわかりにくいですね。

なので最初に、重要なポジションであるこの2箇所を把握しましょう。

図2、Cメジャースケール上のインターバル、重要ポジション



この赤枠で囲った部分から覚えていきます。図では1~7の数字で統一してありますが、オクターブ上の音はテンションとして数えてもOKです。

今はインターバルの把握をやっているわけですが、よく見てみると、赤枠で囲ったポジションそのものは、5、6のルート(トニック)から見たメジャースケールのポジションですね。

これは vol.18 で一度やっているのので、形自体はすぐにわかるでしょう。

今回はそのポジション中の、それぞれの音のインターバルも把握する、ということです。

では、具体的な練習法なのですが、まずは普通に、スケールを弾きながら口で番号(とアルファベット)を呼んで把握する方法があります。

C音を弾いたら「tonic(もしくはroot、1stなど)」とインターバル的な呼び方を確認して、同じように、残りの6音も全て“1音弾く→インターバルを呼ぶ”の繰り返して最後まで行きます。

これが基本の練習法になりますね。

口に出せない様な場で練習しているのであれば、頭で考えているだけでも良いです。
(※口で呼んだ方が早く覚えられるような気がします。)

そしてもう1つ、トレーニングと言うよりは、ちょっと実戦的なものになるんですが、
『コードフォームと同時に覚える(確認する)』と言うものがあります。

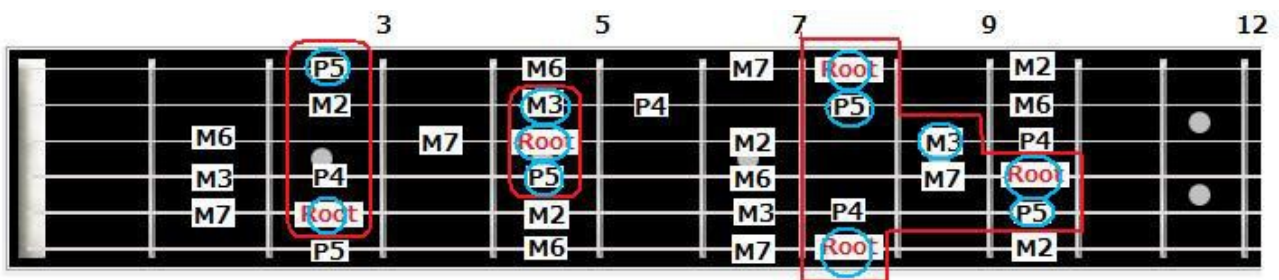
指板上のインターバルを把握する目的の1つに、
『コードの構成を理解する』ということが挙げられるのですが、
それはどういうことなのか?、ちょっとやってみましょう。

まず、適当にコードを決めて、先ほどの指板図に当ててみます。

今はルートがC音なので、Cルートのコードでやってみましょう。
とりあえず一番わかりやすい、普通の「C(メジャー)」のコードでいきます。

Cのコードは、メジャートライアドなので、
root(C)、M3rd(E)、P5th(G)の3音で構成されていますね。

それを踏まえた上で、先ほどの指板図に当てはめて見てみるとこんな感じ。



これは5&6弦ルートのバレーコードのフォームですね。

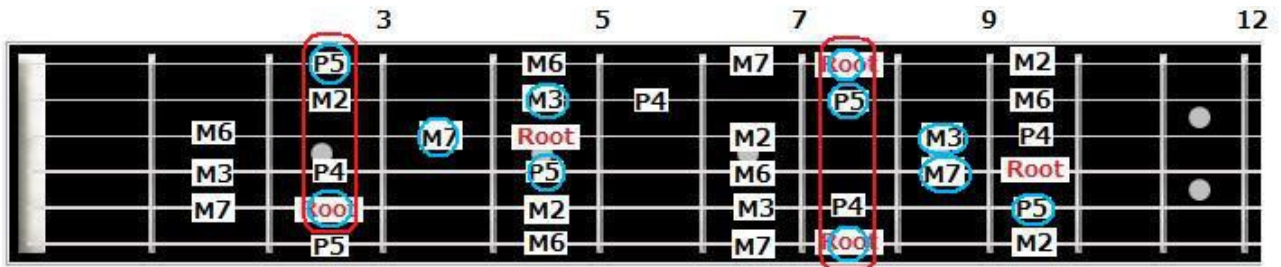
この場合、基本的には、赤枠の辺りが実際に押さえている(弦に触っている)部分、
青丸が鳴らしている音になります。

以前のテキストでもやったことですが、見ての通り、コードネームとしての「C」が表している
root(C)、M3rd(E)、P5th(G)の3音(メジャートライアド)しか鳴っていませんね。

正に、「文字通り(コードネームの通り)」なわけです。

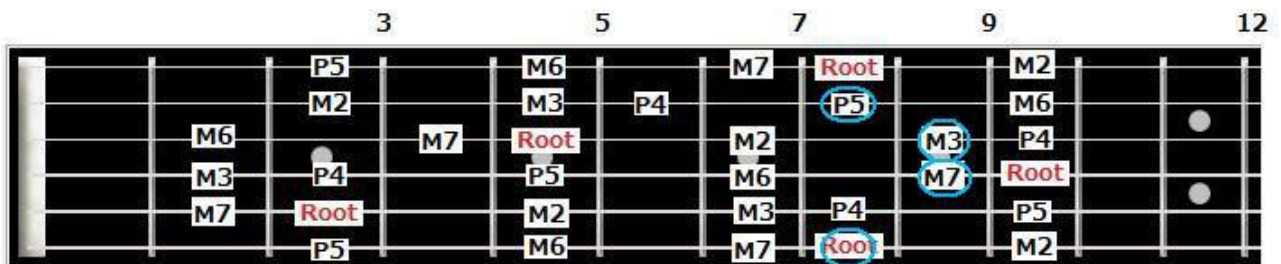
この様に、コードネームの意味と、指板上のインターバルの位置がわかると、他のどんなコードでも地力でコードフォームを作ることが出来るようになります。

他にもちょっと見てみましょうか。例えば「CM7」ならこうなりますね。



CM7 は、C ルートのメジャートライアド、root(C)、M3rd(E)、P5th(G)に、M7th の B 音を加えたものなので、上のコードフォーム内の構成音もそうになっていますね。

CM7 は 6 弦ルートならこんなフォームもあります。



この M7th のコードフォームは、エレキギターでは良く使うのでこれを機に覚えてしまいましょう。

ちなみに、6 弦を人指し指、4 弦を薬指、3 弦を小指、2 弦を中指で押さえます。
(※1、5 弦はミュート)

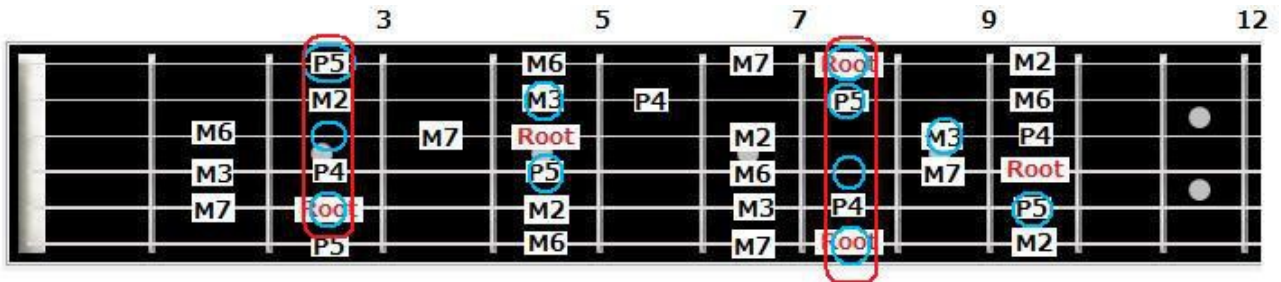
この様な感じで、図 2 で覚えた 2 つのポジションをベースに、色々なコードを押さえてみて、構成音のインターバルを確認していきます。

最初はこのテキストを印刷したり、ノートに書き写したりして、それを見ながらやっていくとわかりやすいでしょう。

今はメジャースケールのインターバルだけを見ているんですが、
後々は $\flat 7$ th(m7th)などの、他の音の位置もそれぞれ把握します。

一例を挙げるなら、例えば「C7」と言うコードならば、root(C)、M3rd(E)、P5th(G)の
メジャートライアドに、 $\flat 7$ th の B \flat 音を加えたものですね。

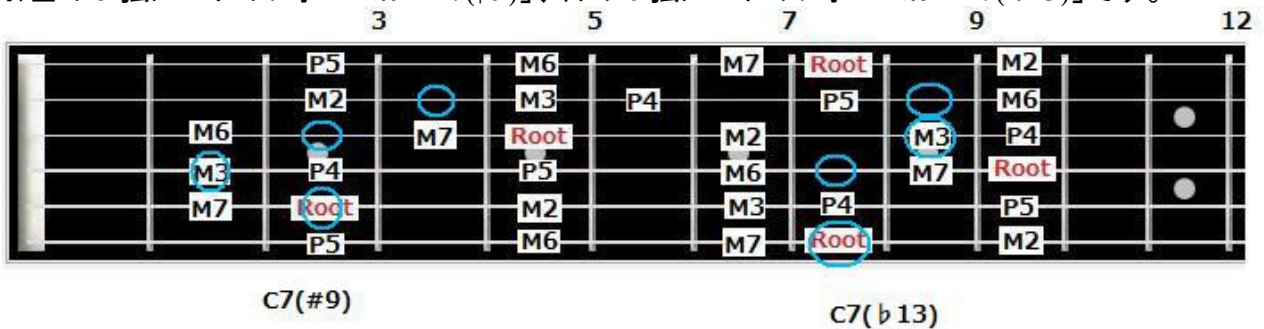
なのでこんな感じになります。



今使っている図には、 $\flat 7$ th の音とインターバルが記入されていませんが、
M7th の半音下の音は $\flat 7$ th(m7th)ですね。

他にも、例えばめんどくさい名前のコード、「C7(#9)」や「C7($\flat 13$)」だと
こんな感じになります。

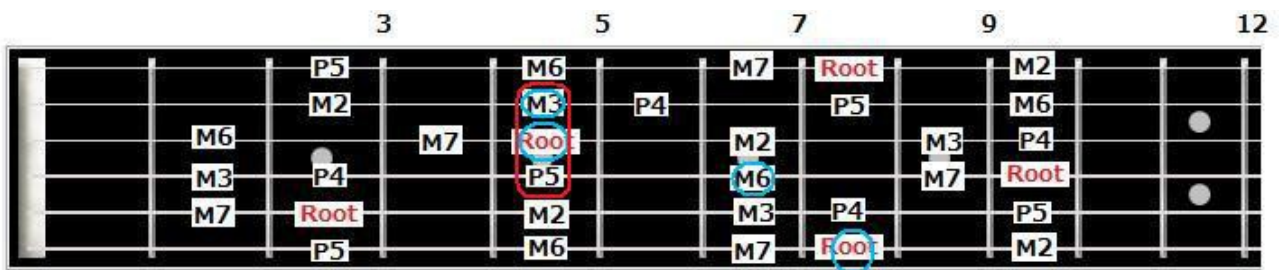
※左の5弦ルートフォームが「C7(#9)」、右の6弦ルートフォームが「C7($\flat 13$)」です。



ギターの構造上、P5th を省略したフォームになっていますが、
どちらもコードネームの通りの構成になっていますね。
(※M2th=9th なので、その半音上は $\sharp 9$ th、M6th=13th なので、その半音下は $\flat 13$ th)

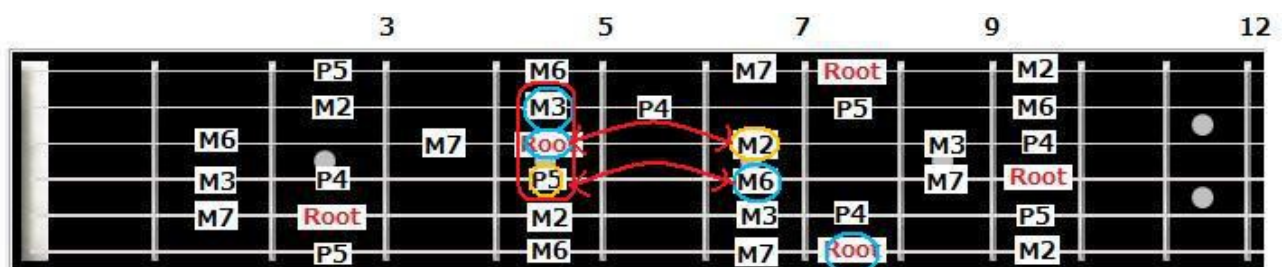
もっと理解が深まれば、こんなフォームも導き出せます。

※C6(少し高度な押さえ方)



6弦を小指、4弦を薬指、人差し指は4、3、2弦をセーハします。

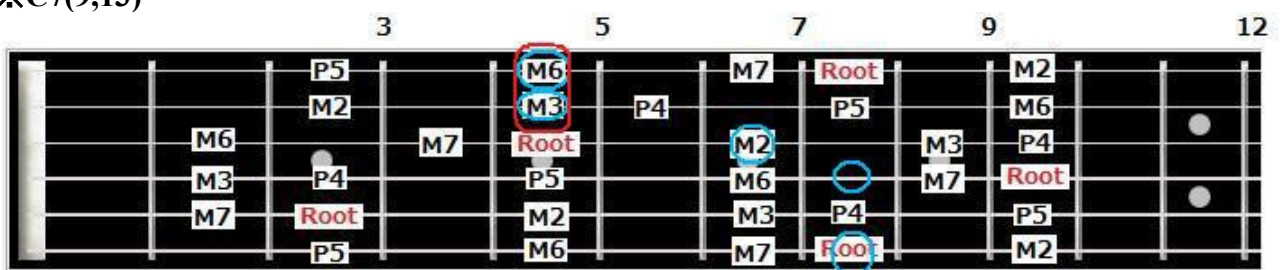
ここから派生するネタとしては、このフォームのまま薬指で4、3弦の7フレットを押さえたり離したり、もしくはハンマリング&プリングして、オレンジの丸の音をフィルイン的に動かしたりも出来ます。



1、5弦はミュートで、主にアルペジオなどで使うフォームですね。

もう1つ例を出しましょう。

※C7(9,13)



これは中々の上級フォームです。

押さえ方は、6弦薬指、4弦小指、3弦中指、1、2弦を人差し指でセーハになります。
(※5弦はミュート)

これは、ある程度手が大きい人は、ロックフォーム(シェイクハンドグリップ)でも押さえられると思いますが、クラシックフォームでも、どちらでも構いません。

この様な、ややこしいフォームをパッと押さえられると、ギターが上手そうに見えますので、マスターしておくの良いことがあるかもしれません。

さて、ちょっと話が飛んだ感じもしますが、今回の内容をまとめましょう。

まず、本題としては、**図2で挙げた2つのポジションのインターバルを把握すること。**
(※ついでにその周辺もわかればベスト)

練習法としては、**通常のスケール練習の中で、インターバルを把握する方法が1つ目。**

2つ目が、**コードフォームと照らし合わせて、コードネームと構成音のインターバルを一致させるというもの。**

基本的なトレーニングとしては、これらを繰り返していく事によって、インターバルの位置関係が段々と身体に染み付いていきます。

この練習を続けていると(≡インターバルのことをいつも考えていると)、状況に応じたコードフォームの選択が上手くなったり、リードプレイ時などに、今弾いている音が、コードに対して何度なのかがすぐにわかるようになってたりします。

こう言ったインターバルの理解が多くのプレイの基本になってくるので、日々の練習に取り入れて、キチンとマスターしておきましょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼